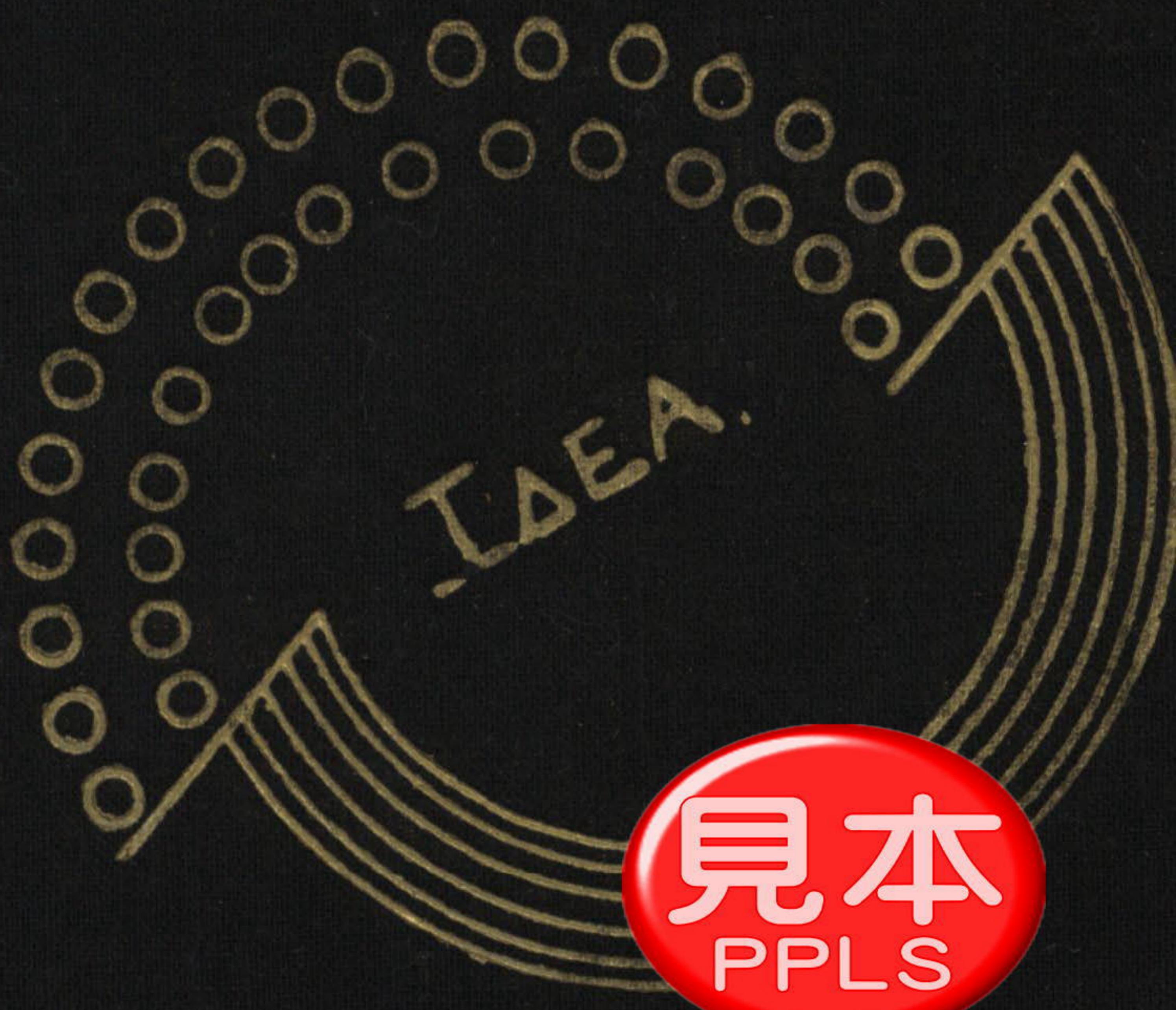


文學士 田 中 長 男 著

認 識 論 概 說

東京 教育研究會 發行





文學士 田 中 長 男 著

認 識 論 概 說

東京 教育研究會發行



序

書物の素張らしい大洪水の中へ此の書物を送り出す。何等かの意味に於レーヴン、デイトゥルを認める人は讀んで貰ひ度い。近時の思想問題にしろ、にしろ、否あらゆる全般の學に於て、認識論的基礎の重大なる事は言ふを俟たない。又哲學中に於ても認識論は少くともその中心科目となつて居る。此所に最も簡にして、而も充分體系的なその解説をなすは、あながち無用の事にも屬さないであらう。

此の書物は獨逸ケルン大學の講師ヨハンネス・ヘッセン博士の「認識論」を骨子とし、それに私のものを大分つけ加えて成れるものである。ヘッセン氏のものは、或は簡明過ぎる程きびきびして居て、それで尙體系的になつて居る事は充分讚賞に値する。然し只その思考が幾分實在論的なものに解釋されはしないかを思つて、それを十分觀念論的な方向に引戻すべく、私の考へを述べたのである。觀念論的な思想傾向が良い



三才圖會

目次

緒說

第一章 哲學の本質 ······

第二章 哲學の體系中における認識論の位置 ······一四

第三章 認識論小史 ······一七

第一編 一般認識論 ······二

現象論的豫審。認識なる現象とその内に含まれて居る問題。

第一章 認識の可能性 ······三

現象論的豫審。認識なる現象とその内に含まれて居る問題。

第一章 認識の可能性



はならない。

其所で、哲學者達が今迄の哲學の歴史に於て與えた、色々の本質規定を聚集し、そする事によつて、哲學の此の如き完全な定義に到達せんと思ひ及ぶであらう。然しその得んとする目標には到達し得ない。それは、我々が哲學史に於て出會はず種々の事にまちまちな事が多く、それから哲學の統一した本質規定を獲得する事は全然不可能であると思はれるからである。例へば、プラトー及びアリストテレスの、哲學は學であると云ふ定義と、ストイック派及びエピクター、ロス學派の、哲學は堪能、従つて最高の悦樂への努力なりと云ふ定義とをまあ比較して見るがいい。或は、近世に於て、クリスティヤン、ゾルフが哲學に關して、あらゆる可能的なものが如何にして、又何故可能であるかを研究するのが哲學であると定義したのと、フリードリッヒ・ユーベルウエッヒが、彼の有名なる「哲學史綱要」で與えた、哲學とは「原理の學なり」と云ふ概念規定とを比較して見るがいい。斯くの如き異論を見ると、此の方法に依つて哲學の本質規定を發見する事は到底見込みのない事が分る。此の如き規定を獲るには、かうした概念規定から離れて、哲學の歴史的事態そのものに直面するより外はない。歴史的事態は、我々が哲學の本質概念を把握し得る素材を與えて呉れる。此の方法を「哲學の本質」に關する彼の論文中に於て用ひた



のが、ヴィルヘルム、ディルタイである。これから我々は自由な態度で彼の方法に準據し、彼の思想を延けて見ようと思ふ。然し、上述の方法は一つの根本的な困難に坐礁しなければ思はれる。此の方法は、哲學の歴史的事態によつて、その本質を規定せんとする所が哲學の歴史的事態を云々するには、既にその前に哲學の概念を把持して居なくては考へられる。故に、哲學の概念を事實から得ようとすると、その前に既に何が哲學であるかを知つて居なくてはならない。かくして我々が今企て様として居る哲學の本質規定の内には、厳密に云ふと、一つの循環論證がある様に考へられ、全方法は此の困難に難破しなくてはならぬやうに思はれる。

然しさうではい。前述の困難は、哲學の一定的な概念から出發しないで、あらゆる教養ある人々が哲學について持つておる、一般的觀念から出發したならば取り除かれ得るものである。ディルタイが云ふ如く、「哲學なる一般的觀念を醸し出すところの諸々の體系について、それ等に共通した一つの事相を見出す事を先づ試みなくてはならない。」

斯の様な體系は事實存在する。哲學と云はれ得るかどうか疑はしい思惟構成が多くあるとしても、此の如き疑問が沈黙する體系も數多ある。それ等の體系を知つて以來、人類はそれを何時も、哲學

